

高校生の社会参加に関する一考察

栃木県の職業高校生の実態について

島 田 繁 雄

【目次】

はじめに

I 職業高校教育の現状と問題点

- 1 青少年（高校生）をとりまく社会環境
- 2 地域社会の現状
- 3 家庭の現状
- 4 工業高校教育の現状と課題

II アンケートにみる職業高校生の学校外活動

- 1 調査目的
- 2 調査方法
 - (1) 調査方法
 - (2) 調査対象期日の選定理由
 - (3) 調査対象者

- 3 部活動について
- 4 アルバイトの現状について
- 5 ボランティア活動の現状について
- 6 現代の高校生像
 - (1) 職業観や仕事観について
 - (2) 社会観について
 - (3) 生活観について
 - (4) 人生観について

III 学社連携・融合における高校生の位置づけ

- 1 社会教育の役割について
- 2 高校教育における学社連携・融合を考える
- 3 ボランティア活動の教育的意義
 - (1) ボランティア活動について
 - (2) 高校生全体のボランティア活動の現状
 - (3) ボランティア活動の実際
- 4 ボランティア活動と評価
- 5 アルバイトの位置づけ
- 6 アルバイトの課題

まとめにかえて

注・参考文献等

はじめに

平成8年度栃木県の中学生の97%は、高校への進学を希望しているが、その希望先は都市部の普通高校に目立っている。郡部や職業高校系を中心に定員割れもみられる。特に職業高校や都市部のいわゆる周辺高校といわれる高校に入学しても不本意入学という意識が強い。そういう生徒は、高校入学後も学校生活や学習などに積極的に取り組まない傾向にある。帰宅部等といわれ放課と同時に帰宅し、テレビを見たりゲームに熱中して過ごしたり、早い生徒では1年生の夏休み前後からアルバイトをして過ごしている。

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の中に、学校・家庭・地域社会の連携と家庭や地域社会における教育の充実や生きる力の育成を重視した学校教育の展開などが述べられている。

しかし、現在の子供たちは、物質的な豊かさや便利さの中で生活を送っている。いわゆる「進学校」といわれる高校に進学した生徒は、塾や自宅での学習に追われ「ゆとり」のない生活を送っている。職業学科の生徒は、先にも述べた通り比較的時間があるのでアルバイトなどをして、学校生活を送り積極的に自分の将来について目標を定めはたらきかける生徒は少ない。そんな中でも将来や、今自分は何をしなければいけないのか真剣に悩み苦しんでいる生徒もいる。地域社会のジュニアリーダースクラブに入会しボランティア活動などに打ち込んでいる生徒もいる。

本稿では、これらの状況を踏まえ、I章では職業高校教育の現状と問題点を取り上げ、II章では職業高校生にアンケートを実施し、結果より職業高校生の学校外活動について考察し、III章では学社連携・融合において高校生を位置づけるための課題と提言を述べることにする。

Ⅰ 職業高校教育の現状と課題

1 青少年（高校生）をとりまく社会環境及び状況

今日の青少年の意識や行動は、高度経済の成長とそれらに伴う急激な都市化、情報化、核家族化、高学歴化など社会の変化と深いかわりを持っている。¹⁾ しかも、第二次世界大戦の敗戦から戦後の欠乏と貧困の時代を乗り越え、国家の急激な変化と成長に価値観も多様化してきた。その急激な変化や成長がさまざまな形で青少年の人間形成に影響を与えている。産業構造の変化による農家の減少それらに伴い企業従事者の増加。それまでは、子供は親の働く背中を見て育つと言われてきたが、身近に接する機会が減少し、自らも勤労体験の機会が少なくなってきた。現代の青少年は、平和と物質的豊かさに恵まれた環境の中で成長してきた。また、マスメディアの発達や高等教育の普及で豊富な知識や情報を持っている。

テレビ・ラジオ・雑誌等のマスコミによる情報が、青少年に直接間接に触れさまざまな知識や情報を与えてきた。しかし、その情報や知識が人間形成に非常に大きな影響を与えたことも事実である。

例えば、テレビの視聴時間が増加しテレビゲームに夢中になり仲間との活動や戸外における遊びが減少している。さらに、学校を一步出て周囲を見渡せば有害図書と言われる雑誌が手には入るし、ビデオ等を通して性に関する情報が氾濫している。特に露骨な性描写や粗暴性、残虐性を助長するおそれのあるこれらの情報を子供たちは、簡単に手に入れることができる。それらを見て良いか悪いかの判断を子供達自身がしているが、最近ではその判断ができない子供たちが増加しつつある。

このような事情から、青少年の教育環境の変化に対応すべく、青少年の人間形成に対する家庭教育、学校教育、地域社会の役割と連携についての効果的なあり方を改めて検討しなくてはならない。

2 地域社会の現状

都市化や過疎化が進み二極化の状況の中で地域社会の連帯感が失われつつある。それに伴って地域教育力も低下する傾向にある。例えば、一時代前であれば「道であったときには声をかけたり」、「危険なことをしていれば注意をしたり」、「悪いことをすれば他人の子供でも叱った」などのかかわりを持っていた。しかし、平成5年の総理府の世論調査など

を見ると、地域の子供たちとのかかわりを約3割の人たちが全く持っていないと答えている。特に、中学生や高校生になるとなおさら声をかけなくなったり、見て見ぬふりをするが多くなる。

平成6年の文部省の調査では、子供の健全な成長のために地域の大人たちが積極的に子供たちに関わっていくべきと思うかどうかについて、子供たちの保護者に尋ねたところ、「積極的に関わっていくべきと思う」、「どちらかといえば関わった方がよいと思う」と答えた者の合計は89.3%に上り、保護者の意識のうえでは、地域社会が子供たちの成長に関わっていくべきであると考えていることがわかる。²⁾

特に、子供会や、スポーツ少年団などの指導といった、社会参加活動については、現に活動している人や、活動に参加したいと考えている人が徐々に増加している。これが中学生や高校生とのかかわりとなると現状ではほとんど見られない。学校側の受け入れの問題もあるが、これは、中学校や高校との関わりが難しく、指導が専門的になり大変なこともある。また、学校のスポーツの状況を見ると、勝利至上主義と言われるように何がなんでも勝つんだという風潮もある。これは文化や社会情勢が変わらなければむずかしい、問題かもしれない。

また、地域にコンビニエンス・ストア（以後「コンビニ」と表す）が増加しほとんどのコンビニが24時間の営業を行い、そこにいけば誰かに会うことができるということから、別に買い物があるわけではないのに子供たちのたまり場になっている。このことから子供たちにとってコンビニは「オアシス」といわれている。しかし、これはコンビニにとっても出入り口付近でタムロされていては、店に入りたいと思って何となく「入りづらい」という話も聞き営業上からも店の雰囲気の良いくないなどいくつかの問題を含んでいる。社会にとっても見方を変えると問題を発生する引き金の場にもなりうる可能性を持っている。

3 家庭の現状

総務庁の国勢調査による核家族化の傾向は、昭和45年71.4%から平成7年79.2%まで増加している。共稼ぎも、昭和40年41.4%から平成4年53.1%まで増加している。

核家族化や少子化が進み、父親の単身赴任や仕事中心の生活で家庭での父親の存在感の希薄化、女性の社会進出による家庭での子供の孤独化、家庭教育

に対する親の自覚の不足と責任の低下、そのために生ずる親の過保護や放任などから、子供の教育力は低下する傾向にあると考えられる。³⁾

その結果どのようなことが生じてきたか考えてみると、

- (ア) 自ら判断することができず、人にゆだねてしまう。
 - (イ) 物事に消極的になり、何事も人任せにしてしまう。
 - (ウ) 指示待族と言われ、人に指示されないと動き出すことができない。
 - (エ) 何でも親がしてくれたので、自己実現が遅れ、自ら生きがいを見いだすことが難しい。
 - (オ) 基本的な生活習慣を身につけさせることができない
- など。

子供をしかる場合にでも、子供の顔色をうかがいながらでは、本気になって怒ることはできない。子供にしてもこれをしたら怒られるかもしれない、あるいは親は怒るだろうと思っている。ところが、「そんなことはするな」ぐらいで済んでしまう。子供にすれば、どうしてと思う。常に時間に追まわったり、顔を合わせれば「勉強しろ、勉強しろ」といわれ何かイライラし、欲求不満、消化不良の状態が続く。何か満たされない、何かしたいが、何をしたらよいかわからない状態が続く。

日本経済のバブルの崩壊により、会社のリストラや残業時間の短縮などにより父親の帰宅時間が早くなり、会社や仕事中心のライフ・スタイルが変化してきたが、今までの生活が身についてなかなか抜け出すことができず、戸惑いを感じている部分がある。これまで会社や仕事を優先していたので子供とあまり顔を合わす時間がなかった。

たとえば、土日が休みや帰宅時間が早く、家にいても何をしてもよい、子供との会話に戸惑ったりして、本来当たり前にならなければいけないことなのに、何となく遠慮をしてしまうこともある。

次に、勤労至上主義の価値観が強く、働くことこそ人間の値打ちがあるという意識を持っており、余暇あるいは遊びを、子供たちとの間にうまく活用することができない。つまり、遊びは悪いことだという意識が強く、仕事第一という感覚が頭から離れないでいる。服装などを見ても今の子供たちが身につけている洋服を見ると、理解しようとする前につい眉をしかめてしまったり、小言をいってしまうので子供たちとの距離をなかなか埋めることができない。

い。子供たちも今まで仕事が忙しかったりして、あまり話す機会もなかったのに時間ができたからといってこれでは迷惑だと思っていることもある。

朝日新聞ウオッチ論潮に松原隆一郎氏は、書き出して「父親」が今、自画像を描けずに困惑している。子供との関係を確立できずにとまどっているのは父親の方であるらしい」と。その中で作家の加藤仁氏の「挫折しても赤裸々に生きる姿をさらけだすなら子供は目を向けて語りかけてくるだろう」ということばを紹介している。⁴⁾

4 工業高校教育の現状と課題

普通科志向が強く都市部の普通科高校に進学を希望している生徒が多い。そのため、中学校で自分の意志とはあまり関係なく、いわゆる「輪切り」と称され受験校が決定されている現状である。結果として進学校に進学できなかった生徒は、あきらめたり、興味・関心がオートバイやアルバイトなどに移り学習意欲が高校に進学した途端に下降していく生徒も見られる。

高校教育の現状と課題点を要因別に分けてみると以下のような点が考えられる。

(ア) アルバイトの増加

現在高校生のアルバイトは増加しつつある。普通科より職業学科、私立より公立の高校生の方が多い。⁵⁾ その職種の中で高校生の多い職種は「ウェ이터・ウェイトレスといったサービス業」、店員などの販売業」が大半を占めている。特に、都市部でのコンビニエンス・ストアやファースト・フード・ショップなどの産業では高校生は欠かせない労働力となっている。

給与の使途もバイクの支払いや燃料費、洋服、食事代、ポケットベルや携帯電話の使用料などいわゆる遊興費に当てている生徒もいれば、一部ではあるが毎月の授業料など親に払ってらもらわず自分で学資を払っている生徒もいる。

学校の多くはアルバイトは禁止か許可制をとっている。その理由は、「勉強に身が入らない」、「疲れて授業中居眠りする」、「異性問題も起きやすい」などさまざまである。

逆に勤労体験や社会の一員として仕事をする場合、特に「サービス業や販売業」は直接お客と接するので会社の業績に直接結びつくなど責任を持たなければならないことなど、学校にいては経験できない社会の現実に触れる機会であり、真剣勝負の世界に一

時的であれ身を置くことになる。また、アルバイトをやって、敬語の大切さやお金を稼ぐことの大変さ、親の苦勞なども理解することができる。

(イ) ゆとりのない生活

ゆとりについてであるが、進学校に進学した子供たちも学校の生活、自宅や塾での勉強にかなりの時間をとられ、「ゆとり」のない忙しい生活を送っている。そういった受験競争が低年齢化の傾向が見られるのは教育上大きな問題といわなければならない。

(ウ) いじめ問題

いじめや登校拒否の問題も極めて深刻な問題といわなければならない。本県においてもいじめを苦に自殺未遂などが発生している状況である。そのいじめも年々陰湿化の傾向にあり、表面にでない部分が多くなっている。

(エ) 気力の喪失

現代の子供たちにはあまりやる気が見られないと言われる場合でも、子供たちだけの責任ではなく学校側の教育の姿勢や、教員の考え方や、生き方も反映しているのではなかろうか。たとえば、何か問題が発生したときの、子供に対する関わり方や、対処の仕方が問題の本質をとらえず通り一辺の片付けに終始してしまえば、問題の解決にはいたらず同じような問題が再び発生することも考えられる。

授業などにおいても生徒のやる気を引き出すのが教師の役目であるが、進め方によっては逆になってしまう。もちろん本人の意識が第一であることはいうまでもない。

(オ) 公務の多忙化

教師にゆとりがなく、忙しすぎるために生徒とゆっくり話し合う時間がとれないことも、問題である。そのためには、本来学校が持つべき機能を十分発揮できるようスリム化が必要である。ではその忙しさはどうしてであろうか。以下のようなことが考えられる。

- ・基本的生活習慣の指導
- ・校内外における会議や打ち合わせ
- ・部活動の指導
- ・各種研修会・研究会への参加及び準備
- ・生徒指導や校外補導

など、その他にも各種委員会や行事、特に職業高校や都市部の周辺校については、問題行動を起こした生徒の処分や指導について生徒指導委員会が放課後開かれ、生徒と個別に話をする時間があまりとることができない。

部活動の指導について考えてみると、誰でもがで

きる訳ではないので教職員の中でも負担が偏ってしまう。部活動について、高校側からみると小中学校ではやり過ぎではないかという意見が多く、今後見直すべき段階に来ていると思われる。このようにあまりにも多くのことを学校が担いすぎている。その反動として、本来最も大切にしなければならない授業にも支障がみられる。これら以外にも多くの役割を抱えている。ただ学校のスリム化だけを訴えても、行政・地域社会・家庭との連携をしていかななくては問題の解決は難しいと考えられる。

そういう中で、校則とかきまりといったことで厳しすぎたりすると、個性の尊重といいながらも生徒を画一的にしてしまっている傾向もみられる。学校が支配を強めれば強めるほど、学校教育のなかみは空洞化し形骸化していく。⁶⁾

(カ) 地域社会への関わり

子供たちも、社会や地域に対し積極的に関わっていこうという気持ちもあるが、何をどのようにしたらよいかわからない状況がみられる。例えば、昭和46年の総理府の調査では、20歳代では「地域や社会のための活動や奉仕活動をしてみたいと思う」と答えた者が27.5%であったのに対し、平成2年の総理府の調査で「社会参加活動に参加してみたいと思う」と答えた者が39.4%に増加している。また、平成7年に起こった阪神・淡路大震災や平成9年に発生した日本海でソ連のタンカーが座礁し、重油が流出した事故の際にボランティア活動に参加した人の中で、10歳代から20歳代の若者が多くを占めるなど、社会参加や社会貢献に対する意欲は強いものがあると思われる。⁷⁾

地域社会に目を向けると、各市町村単位で実施しているジュニア・リーダース・クラブ(JLC)に入会し、ボランティア活動(特に子供会活動)に取り組んでいる姿が見られる。子供会行事のキャンプなどをスムーズに進めるには、経験者が父兄の中にいれば問題なく進められるが、いない場合には大変である。JLCの協力があれば子供たちと年代が近いこともあり、より視点を子供に近づけられるためスムーズに進めることができる。

II アンケートにみる職業高校生の学校外活動

1 調査目的

高校生の活動を考えたとき次のように分けられる。

(ア) 目的的活動

学習 資格取得 部活 ボランティア アル
バイト

(イ) 無目的活動

休み 遊び

ここで、目的的活動とは、自己実現を図るためなどの目標をもった意図的な活動や学習として、それ以外を無目的活動とする。

今回は、学校外活動ということを主眼においたので目的的活動の中の部活、ボランティア、アルバイトの三つに絞った。部活は学校内で行うのが主であるが、対外試合等学外との接触も多いので学校外活動にいった。

本来であれば、「高校生の意識調査」であるから県内の全学科から行わなければならないが、サンプル数や日程の問題などの理由から職業高校の工業科ということに絞った。今回のアンケートでは、高校生活をどのように考え学校生活を送っているのか。アルバイトやボランティア活動をどのように考え、どのように受けとめているかなどを調査し、高校生の社会参加の在り方を考える上での基礎資料とする。

アンケートは巻末に収録してある。

2 調査方法

(1) 調査方法

調査方法は、自記式質問用紙配票法による集合調査法である。県内の工業高校に依頼し、調査対象者にアンケート調査票を配布してもらい、その場で回答してもらい、即日中に回収した。

(2) 調査対象期日の選定理由

調査期日を10月1日から10月30日とした。その理由については、

- ・3年生が対象なので、部活動も終了している。
- ・進路についてもほぼ決定し、時間的に余裕ができたと推定できる。
- ・対象にした学校の行事や都合に合わせられる。などである。

次に、この調査で明らかにすべきことを下記に上げる。

- ・部活動の参加の有無と連続性
- ・アルバイトについて
経験の有無 職種や内容 今後の継続の有無
労働日数及び時間 経験しての感想 良かった

こと及び困ったこと どうか

・ボランティア活動について

活動の有無 種類や内容 今後の参加の有無
どのような活動に参加したいか 参加したくない理由 どうか

(3) 調査対象者

栃木県内の3年生を対象に実施した。学校の規模により3クラスから6クラスを対象に実施しアンケート人数は男子764名女子52名の合計816名にのぼった。アンケートは2回実施し、1回は予備調査として傾向を洗い出し、2回目調査の基本データとし、それを元にアンケートの内容の作成を行い本調査とした。1回目は夏休み前に実施し、2回目は10月1日以降に実施した。

3 部活動について

アンケートをとる前に、部活動に参加している生徒は、アルバイトやボランティア活動に積極的ではないか。逆に、部活に入らなかったり、途中で退部した生徒はアルバイトやボランティア活動に消極的ではないかという仮説を立てた。

三者の関係は、表1のようになるが部活動に参加しているから他も積極的になるかということ、その傾向は見られるが必ずしもそうとは限らない。ただ、ボランティア活動についてみると、部活動を退部したり入部しなかった者はあまり活発に参加していない。

部活動、アルバイト、ボランティア活動の三者の関係について表1に示す。

(表1) 三者の関係

部活動入部者

アルバイト・ボランティア

共経験	男子 131名 (17.1%)	女子 8名 (15.4%)
アルバイトのみ	男子 116名 (15.2%)	女子 9名 (17.3%)
ボランティアのみ	男子 36名 (4.7%)	女子 2名 (3.8%)
部活のみ	男子 43名 (5.6%)	女子 3名 (5.8%)
計	326名 (42.7%)	22名 (42.3%)

部活動退部者

アルバイト・ボランティア

共経験	男子 90名 (11.8%)	女子 5名 (9.6%)
アルバイトのみ	男子 136名 (17.8%)	女子 6名 (11.5%)
ボランティアのみ	男子 10名 (1.3%)	女子 3名 (5.8%)
退部のみ	男子 23名 (3.0%)	女子 2名 (3.8%)

計 259名 (33.9%) 16名 (30.7%)

入部経験なし

アルバイト・ボランティア

共経験 男子 40名 (5.2%) 女子 1名 (1.9%)

アルバイトのみ 男子 88名 (11.5%) 女子 9名 (11.5%)

ボランティアのみ 男子 12名 (1.6%) 女子 2名 (3.8%)

経験なし 男子 43名 (5.6%) 女子 2名 (3.8%)

計 183名 (24.0%) 14名 (26.8%)

合計 764名 52名 (816名)

表2のように3年間部活動(運動部と文化部及び男女を合わせた数)継続者は、以下ようになる。

(表2) 部活動継続者数

3年間活動 348名 (42.6%)

途中退部者 271名 (33.2%)

部活未経験者 197名 (24.2%)

1997年度の県教委の調査では運動部の高校生(男子)の運動部加入率は28.1%(前年比0.8%減)と部活離れ特に「運動部離れ」が増加していると言われている。⁸⁾しかし、この数字だけを見る限りにおいてはあまり当てはまらないようであるが、入部はしたものの練習について行けない等の理由で退部する生徒も多い。

退部する時期は、早い生徒で1年の1学期、あるいは2年生になってからなどバラバラである。退部してもほとんどの生徒が、再入部することはないようである。

4 アルバイトの現状について

アルバイトの経験者は、地域や学校によっても異なるが以下のようなようである。

(表3) アルバイト経験者数

現在アルバイトをしている 247名 (30.3%)

経験したことがある 388名 (47.5%)

経験したことがない 181名 (22.2%)

これを見るとほとんどの生徒が何らかのアルバイトを経験している。職種はコンビニやスーパーなどの「販売関係」がいちばん多く、次に「飲食店関係」が多くなっている。郵便局、プール監視員といった学校に求人に来る職種や時間に拘束されたり自由があまりきかないものについての希望者は少ないよう

である。

「今後のアルバイト希望」には次のようである。

(表4) 今後のアルバイト希望者

したい (75.0%)

したくない (7.7%)

大半の生徒は、「今後も続けたい」あるいは「したい」という希望を持っている。「したくない」が少ない理由については、アルバイトに行き仕事と思うように行かない、人間関係が大変でしなくなった。あるいは、思った以上に時間がなくなった、最初からアルバイトは嫌だったなどが考えられよう。

「アルバイトの動機」については、以下のようである。

・時間がある

部活に入部していても第2、第4土曜日が、休日になり時間的に余裕ができた。部活を退部したり、最初から入部しないので放課後も自由時間がある。

・普通免許の教習所の費用や車の頭金を貯める

工業高校という性質上車などに関する興味を持つ生徒が比較的多く、学校も3年生の夏休み前後から普通免許取得を許可している。

・友人に誘われて

特にすることもなく、自由時間が多く友人にもアルバイトをしているものがいて、一緒にやろうなどと誘われ軽い気持ちで応じてしまうようだ。などさまざまである。中には数は少ないが学校の授業料や語学学習の専門学校の授業料といった生徒もいる。

「どのようなアルバイトをしたいか」という間については、販売業や飲食店が多い。工業高校生の特徴と思われる職種もある。ガソリンスタンド、建設や製造関係がほぼ同数を占めているがそれらである。建設や製造関係については、自分が学んでいる学科に関係する仕事を選択している生徒が多い。このことについては、生徒たちも将来への展望を考えているとも思われる。少数ではあるが、科学館の説明や展示を経験した生徒もいた。

「アルバイトの週平均の日数」については以下のようである。

(表5) アルバイトの日数

3日～4日 (31.5%)

5日～6日 (30.0%)

1日～2日 (5.5%)

毎日、休日	(5.0%)
長期休暇中	(4.8%)

週平均の数値であるが、私の知る限りでは、長期休暇中の数はもっと多いと思われる。

1日の「アルバイトの時間」については、次のような結果である。

(表6) アルバイトの時間

4時間～6時間	(50.0%)
1時間～3時間	(23.2%)

4時間～6時間(50.3%)、1時間～3時間(23.2%)でこれら以外は非常に少ない。これは、4時間前後が一番多いということと、授業終了後から始めるということを考えれば当然ともいえるだろう。

「アルバイトをして良かったこと」については、主に以下のことである。

- ・人間関係を学んだこと
- ・社会の厳しさを知ったこと
- ・お金を稼ぐのは大変なこと

これらについては、社会にでる前の準備段階として大切なことである。非常に少数であったが「1日が充実するようになった」「仕事は覚えると楽しくなる」といった意見もあった。

逆に「アルバイトをして困ったこと」については、

- ・遊ぶ時間が減った
- ・体調を悪くした(寝不足、ストレス含む)
- ・仕事は大変だ
- ・客とのトラブル

少数ではあるが「学業に支障がでた」という意見もあった。当然といえば当然のことであるが、実際はもっと影響がでていると思われる。良かったことでもでたが、逆に人間関係特に、「客とのトラブルで困った」ということも述べられている。人間関係がいろいろな面で、特に仕事をスムーズに行う上で非常に重要であることが身につけばよいのではないか。

アルバイトの時給は「600円～700円」ぐらいが多く、平均すると月「2万円から3万円」になる。多い生徒では、月10万円前後の収入を得るので、「お金が自由に使えるようになり金銭感覚が変になった」という意見もある。得られた収入については、アルバイトで得た本人の収入であるが、親子でその使途については十分に話をすべきであろう。

「アルバイトについてどう思うか」については、
・社会にでる前に経験した方がよいが圧倒的に多い

- ・学校の許可はいらない
- ・したい人がすればよい

の順になっている。「学校の許可の範囲内」は、「許可はいらない」の1/8にも満たず、いかに学校に届け出ないでアルバイトをしているかがわかる。また「アルバイトに興味がない」生徒が29名いるが、部活、アルバイト、ボランティアの関係のどこかに特に偏っているわけではない。

アルバイトについて全体的に見ると、大半の生徒がアルバイトを経験しているか、現にしている。アルバイトを「している」と「経験した」を合わせると(77.8%)となる。3年生から始まったのではなく1年生、2年生の頃から経験していようだ。「新聞配達」など苦学生タイプは以前は多くみられたが、現在では少なくなっている。動機でユニークだったものとして、部活が終わってしまい「体を鍛えるため」というのがあった。

5 ボランティア活動の現状について

アンケートの結果では、現在ボランティア活動に参加している生徒は26名で全体の(3.2%)である。しかし、3年生までに何らかの活動に参加した生徒は、253名で(31%)に上る。

昨年11月に総理府が実施した世論調査の「ボランティア活動への参加の有無⁹⁾」の回答で、15歳から19歳の「したことがある」は男性36.0%、女性41.0%を示している。工業高校の3年生だけの数値であるので、総理府の調査に比べて特に低い数値ではないと思われる。

(表6) ボランティア活動へ参加の実際(複数回答)

環境保護	92名	(32.2%)
社会福祉施設訪問	72名	(25.2%)
老人介護	59名	(20.6%)
子供会の行事	35名	(12.2%)
募金活動	20名	(7.0%)
手話による会話	8名	(2.8%)

その他少数ではあるが、車椅子の修理、車椅子の介助、点字、市町村の行事への参加等が上げられて

いる。

「今後ボランティア活動に参加したいかどうか」については以下のような結果である。

(表7) ボランティア活動に参加の有無

・是非参加したい	25名 (3.0%)
・機会があれば参加したい	287名 (35.2%)
・あまり参加したくない	272名 (33.3%)
・参加したくない	203名 (24.9%)
・無回答	29名 (3.6%)

「是非参加したい」と「機会があれば参加したい」を加えると (38.2%) になり経験があるを上回る。これは興味・関心が徐々にではあるが、増加しつつあることを示していると思われる。

「どのようなボランティアに参加したいですか」ということには、以下のようなことが上げられた。

(表8) ボランティアの種類 (2つ以内回答)

・自然災害の復興	110名
・環境保護	100名
・海外ボランティア	96名
・子供会の行事	45名
・募金活動	44名
・福祉施設の訪問	30名
・手話による会話	24名
・老人介護	14名

その他少数ではあるが、車椅子の介助・修理、点字等が上げられている。

自然災害の復興が多かったのは、阪神淡路大震災やナホトカ号の座礁による原油流出のボランティア活動がマスコミに大きく取り上げられ、その中でも高校生が多数参加していたことが報じられた影響も考えられる。

「参加したくない人はどうしてですか」ということには、以下のようなことが上げられた。

(表9) 参加しない理由

・興味・関心がない	305名 (37.4%)
・他にやることがあり時間がない	113名 (13.8%)
・参加したい人がすればよい	109名 (13.4%)
・その他	
・ボランティア活動に参加して嫌になった (中学校の時も含む)	
・見返りが無いのにやる気がしない	

- ・何をすればよいか判らない
- ・自分が得をしない

この結果を見ると興味・関心が無いことがトップであるが、ボランティアについての説明不足や活動に対する情報不足も上げられるのではないかと。ボランティア活動について学習不足もその一因であろう。

「ボランティア活動をどう思いますか」ということには以下のようなことが上げられた。

(表10) ボランティア活動をどう思うか

・社会に役立つことだと思う	241名
・大切なことだと思う	218名
・多くの人が参加すべきだと思う	129名
・自分を見直す機会になると思う	89名
・心が豊かになると思う	85名
・やりがいがあると思う	32名

・その他

- ・ボランティア活動を意識せずに活動できるようにならなければいけないと思う¹⁰⁾
- ・本心から人のためにしたい人がすべきだ
- ・本当にやりたくて参加しているのか疑問だ
- ・何とも思わない
- ・自己満足だと思う
- ・自分には関係ない
- ・とても大変なことだ

以上のようなことが上げられている。ボランティアを客観的に見つめ、ボランティアとは何かということを真剣に考えている生徒もいる。ただ、一人一人は大変良いことであると捉えているが、それが実際の活動につながらないのは残念である。

6 現代の高校生像

駅や街角で見かける高校生の中には、腰の辺までずり下げたズボンや髪の毛の色を染めたり、短いスカートにいわゆるルーズソックスといわれる靴下をはいている。

私達社会人には何がよいのか、理解に苦しむ存在である。一口に「年代が違う」とか、「感性が違う」といって片づけてしまいがちである。しかし、今回の2回のアンケートの結果から、彼らの表面的なファッションや行動からだけでは見えてこない、考え方などを感じとることができた。

(1) 職業観や仕事観について

職業を選ぶ基準については「仕事の内容・やりがいのある仕事・給与・通勤距離」等が大半を占めて堅実なことがうかがえる。中には、「給与よりも本当に自分がしたい仕事、自分を磨くことができる仕事」といった意見もある。職業や仕事に関して、「自分の能力や資格が生かすことができれば多少給与が安くてもよい」と考えているようだ。ただ、仕事がすべてというわけではなく、働いて経済的に豊かになり充実した生活を送りたいと考えている。

(2) 社会観について

現在関心のある社会問題は「神戸市の小学生殺人事件・環境問題・いじめ」など自分たちにとって身近と思える問題に関心が強い。特に、進路に直接関係してくる「雇用問題・経済の動向」に大半の生徒が関心を示している。その他の傾向としては、「高齢化社会・政治問題・ゼネコン・暴走族」といった社会問題にも関心を示し、問題意識を持っている様子をうかがわせた。

(3) 生活観について

高校生の必需品について聞いてみると、圧倒的に「ポケベル」が多く、ついで「手帳・携帯電話・テレビ・ゲーム」等となっている。テレビ等も一人一台という時代の変化の中で、コンビニエンスストアも高校生に欠かせないものになりつつある。

(4) 人生観について

現在悩んでいることは、「就職・進学」が最も多く、「時間がない・お金」が続く「人間関係・異性」等となっている。中には、「生き方」について真剣に考えているものや、モラトリアム時代を反映してか「大人になりたくない」といったものもある。今の時期を考えれば、「就職・進学」は、人生の大きな節目であり、高校生の一番の悩みや関心事である。

充実していると感じるときは、「親しい友人や仲間」といえるときが最も多く、学校関係で充実した時間は「部活」のときだけで、ほとんどが学校を離れた時間になっている。ただ、少数ではあるが「実習の製品が完成したとき」というのが何人かいる。

学校生活はどうかという質問に関しては、「充実し

ていない」「どちらともいえない」を合わせると(78%)に上り、5人に4人は高校生活に満足していないことになる。これは、高校教育上の問題でも述べたが、進路を決定する際に自分で進学先を決められないことや、高校生をとりまく環境が、高校生を学校外に向けさせてしまうことも学校が充実していない原因になっていると考えられる。

しかし、部活動などに参加していても「充実していない」満たされないものがあると感じている。これらのことを考えてみると、現代の多くの子供たちは「居食住」には満たされ生活する上では不自由さを感じなくなりつつある。

図1の「欲求領域の三角形」によれば、人間が生きていく上で「生存確定欲求」が根底にある。これは、人間が生きるために最低限必要な欲求であり、その上に、よりよい生活に必要な「生活向上欲求」がある。¹¹⁾ 現代の高校生は、この二つは十分に満たされている。

しかし、何か心に満たされないものを感じ、欲求不満感を持っている。そのため常にイライラして何かに八つ当たりしたり、一寸したことで気に入らないと「むかつく」とか時には「暴力」に及んだりすることも見られる。イライラ感や焦燥感是自己で分かっていてもどうにもならない場合もある。これらのことは、子供たちだけではなく我々大人にもあてはまるような気がする。

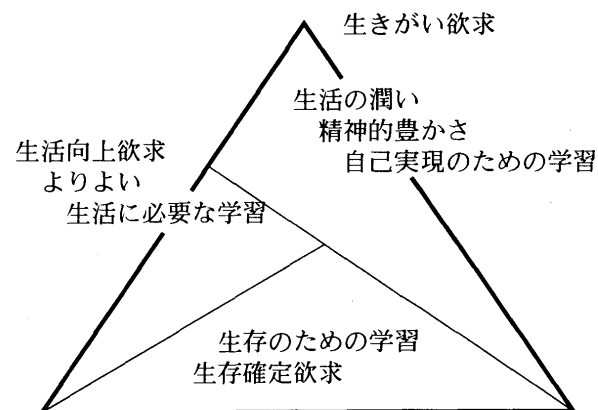


図1 欲求領域の三角形

III 学社連携・融合における高校生の位置づけ

1 社会教育の役割について

少年期の時期は、発達段階において前半期は、身体的な機能が一応整い、情緒的にも徐々に安定し、自己主張ができるようになり集団生活にも対応でき

るようになる。身体的活動に積極的に関心を持つようになり、家庭や学校から興味・関心が外の社会に広がってくる。後半になると仲間や集団に対する意識が強くなり、仲間との生活の中に自己の安定を求めるようになる。学校においても義務教育後期に入り、高校進学を選択の時期にあり精神的に非常に不安定な状況におかれ、一人一人の欲求がさまざまな形で現れすべて満たされるとは限らない。

したがって、この時期における社会教育の主眼は、少年自身が自発性に基づいて、多面的に活動できるように援助し、集団活動を通して仲間とのふれあいや家庭や学校では体験しにくい学習経験を持つことにより、青少年の成長発達を促進するところにある。¹²⁾

青少年の多くは、自然との触れ合いを望んでいるが、その実現はますます困難になりつつある。本来人間は自然との触れ合いを求める強い欲求を持っている。¹³⁾ 特に、青少年が自然に親しみ、ふれあうことは心身の健全な成長を図る上で重要なことである。しかし、都市化が進み、工業団地の地方への進出が促進され、人々の生活環境の中から自然が急速になくなりつつある。地方においても自然と触れあう機会はますます少なくなりつつある。

このような状況の中で、青少年が家庭や学校の制約を離れ主体的に決断し、自己の力を確認できるような場を通じて自主性を育て、異年齢の仲間との集団行動を通じてその社会性を育成するところに社会教育の役割がある。そのためにも、さまざまな活動が展開できるような自然環境や文化的、科学的な興味・関心を追求できる施設が用意されなければならない。

どのような施設が中高生の活躍できる場として、提供できるか考えてみると、

- | | |
|----------|------------------------|
| ・青少年教育施設 | 利用グループへの参加や指導・援助 |
| ・青年の家 | 主催事業への参加や援助 |
| ・公民館 | 地域子供会行事の援助 |
| ・図書館 | 視覚障害者のための展示図書等の作成 |
| ・博物館 | 展示資料の収集・制作等における学芸員への協力 |

などである。

2 高校教育における学社連携・融合を考える

学社連携では、学校と社会がそれぞれの領域を確定した上で、一方が主体となってそこでは十分でな

い部分について他方の協力を求めるという関係である。学社融合では、その両者が重なり合った部分が存在しその部分が融合である。¹⁴⁾ 栃木県も『学校と地域が一体になって子供たちに「生きる力」を育むために』¹⁵⁾ という手引きを出版している。しかし、現状を考えると学社連携・融合の意義や重要性は、理解されていると思われるが、その具体的な進め方や一般職員までとなると、十分に理解されているかどうかは難しい。例えば、社会教育活動などで生徒の派遣依頼が市町村からきた場合でも、手続き的なことや一般職員の共通理解を得ることはなかなか難しい。あるいは、複数の近接の学校で協力しあって行う行事などでも学校間格差などが引き合いに出され実施が困難な場合がある。

特に進学校などでは、授業が優先される。また、教職員の研修会等への参加も積極的であるとはいえない。これは、学校行事などが忙しくなかなか学外への研修会まで手が回らないことも一因としてある。

学社連携・融合を実践するためには、学校教育、社会教育の2つの教育をすすめるうえで、お互いに不足している部分を補完しあい、お互いの立場を理解し役割を自覚することが必要であるといえる。それには、「～をしなければならない。」といった一つの価値観にとらわれず、個々の立場やポリシーが明確になっているとき、その良さを学びあい、吸収しあって相互に尊重しあうことが必要である。

次に、学校側、地域社会側のメリット、デメリットについて考えてみる。

(ア) 学校側のメリット

学校を開放することにより地域社会との連携がより密になり、負担が減少することも考えられる。

文化的なクラブではより専門的なことで指導（華道・茶道など）が受けられ、地域のさまざまな年齢層の人々と接する機会が増え、教育効果の増大が期待できる。

地域社会で必要としているより具体的な情報が得られ、対応がとりやすくなる。

子供たちを見てもらうことで、予防的効果がある。学校教育に対して地域の理解が深まる。

(イ) 地域社会のメリット

地域の資源を導入したり、クラブに専門的な人材を活用することにより地域住民も社会教育活動として授業に参加できる。学校教育に対する理解を深められる。学校で養った成果が、家庭や地域社会の教育力の向上に期待できる。

ここで言うメリットとは、現状に変更を加えなくても予想できる利点であり、デメリットとは、現状が改善されない限りにおいて発生すると予想される問題点である。

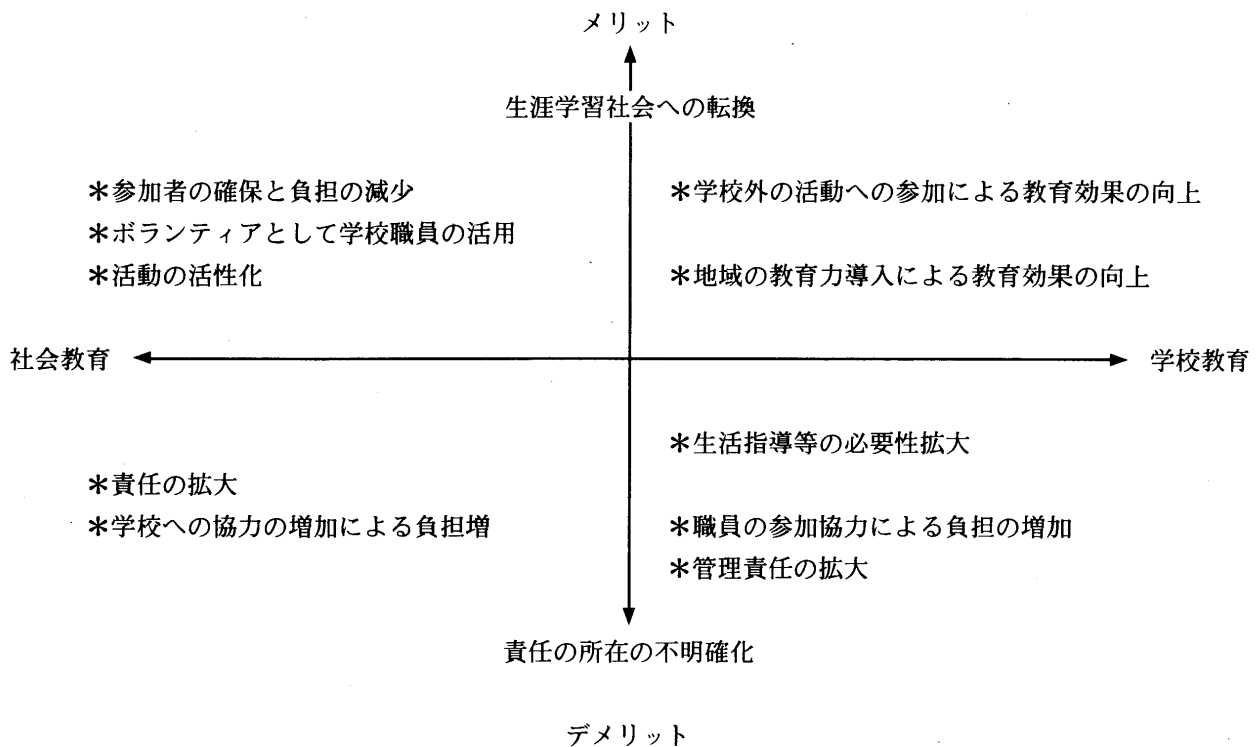


図2 学社連携・融合¹⁶⁾

3 ボランティア活動の教育的意義

「ボランティア」(Volunteer)、とは“主体的な人”と言う意味である。言葉を変えれば、自らの自由意志をもって社会に参加し、自己や他者の「主体的意思」を尊重し、「無償の価値」の精神的文化を育み、社会における公共の利益の探求をとおして、自然環境における生命秩序の再生と創造や人類の共生のための「普遍的文化」を探り、社会の矛盾の解決のための補完的役割にとどまらず、つねに未来を切り拓く「先駆的役割」をはたすための行動をする人々のことをいう。¹⁷⁾

そうした人々を育むための学びを「ボランティア学習」と名づける。そうした学習の機会が学校にとどまらず、「家庭」や「地域・社会」などのあらゆる教育の機会に必要である。

また、ボランティア活動を体験させることにより生徒たちの自己実現を図るとともに、社会連帯の精神を培い、協力して助け合う社会を実現しようとする人間を育成するのが、学校・家庭・地域が連携して推進するボランティア教育・ボランティア活動のねらいである。¹⁸⁾

ボランティア学習の定義については、生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の

進行方策について」のなかに、次のように記されている。「ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発性、無償性、公共性、先駆性にあるとする考え方が一般的である。」¹⁹⁾

(1) ボランティア活動について

ボランティア活動の領域は、非常に幅が広く日常のあらゆる面に及んでおり、それぞれの自発性に基づくものだけに、ボランティア活動に参加することにより、自分たちより弱者や高齢者をいたわる気持ちをはぐくみ高齢化社会への対応、自分たちの地域社会の街づくりや形成に貢献することにより、社会参加にかかわることの大切さを学ぶこと、それぞれの立場や能力に応じて参加できるなど社会に積極的に関わることができるなど、その教育的意義は大変大きい。²⁰⁾

また、これらの実際の活動を通して自己実現や自己開発を図ることができるなど、青少年期におけるボランティア活動の体験の意義は大きい。特に、子供たちの社会性や忍耐力の不足が指摘される昨今、ボランティア活動を通して喜び、悲しみ、相手の痛

みなどが直接経験できるメリットは大きい。

では、ボランティア活動にいつ参加するかという時間的な問題である。ボランティア活動をライフサイクルのどこに位置づけるかということについては、「余暇時間」「自由時間」のときであろう。図3は、デューズディエによる「余暇」の三重構造である。²¹⁾ 彼によれば

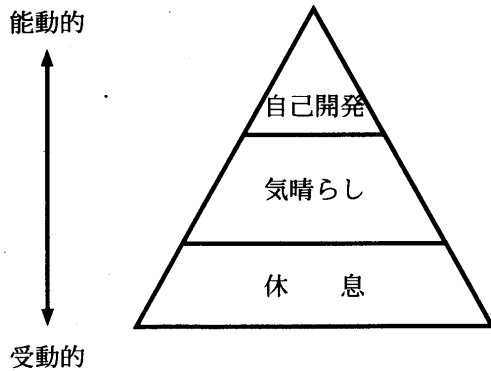


図3 「余暇」の三重構造

「余暇」は、休息、気晴らし、のためにあるが、最終目標は、自己開発になると定義している。その余暇をより積極的、能動的に使うことにより、自己実現や自己開発につながると推定できる。

社会参加の形態を考えたとき、二つの形態が考えられよう。²²⁾

(ア) 営利型	有償型	職業活動
(イ) 非営利型	無償型	ボランティア活動

高校生のボランティア活動を考えたとき、その性格上(イ)の非営利型が妥当ではなかろうか。(ア)の営利型についてはここでは特に触れないことにする。²³⁾

また、その動機、行動、結果の関連を考えたとき次のように考えられる。

- ・動機 自分のため
- ・行動 相手のため
- ・結果 お互いのため

つまり、自分がいて相手がいて初めてボランティアは成り立つわけであるが、その結果相互の交流が図られ、達成感や喜びを得ることができ、自分の存在感を実感することができる。

(2) 高校生全体のボランティア活動の現状

現在、栃木県の高校生のボランティア活動を見ると、市町村単位で実施しているジュニアリーダース・クラブ (JLC) に現在41市町村45クラブに男女合わ

せて810名が所属している。²⁴⁾

その主な活動は、以下のようなものが上げられる。

- ・子供会活動への指導・助言
- ・社会福祉活動への参加
- ・市町村が行う行事への参加
- ・公民館・図書館活動等への協力
- ・地域社会への奉仕活動
- ・学校の部活動JRCに入部し奉仕活動

高校生全体の数からするとまだまだ少数である。クラスや学年・学校全体で地域の清掃活動などを行い、地域の環境美化運動に参加している学校もある。しかし、自主的に活動に参加している数は少なく、与えられて仕方なしに義務感だけで活動している状況が見受けられる。これには本人の意識の問題も大いにあるが、家庭や地域社会あるいは学校が奉仕活動に対して問題が発生したときだけでなく、常に意識されているかという問題でもある。何かやって上げたのだからという、見返りを期待している生徒がいることも見逃せない。このことについては、意識調査のボランティア活動に参加しない理由の中でも述べられている。

(3) ボランティア活動の実際

高校生が参加できるボランティア活動には、以下のような活動が考えられる。

- ・自然災害の復興の援助
- ・自然・環境保護に関する活動
- ・子供会行事への参加
- ・社会福祉施設への訪問
- ・社会福祉に関する活動
- ・募金活動・チャリティーバザー
- ・公共施設での活動

などさまざまである。

ボランティア活動を行うにあたって (心がまえ)

- ・これだけのことをして上げたのだからと言う見返りを期待しない。
- ・相手の立場で考える。
- ・自分だけできると考えない。
- ・相手や周りの人のことを考えて行動する。
- ・無理せず長く続ける。

など参加する側の心がまえである。しかし、これだけでは十分ではないが主に注意することを上げた。

4 ボランティア活動と評価

ここ数年「ボランティア活動の評価」ということがいわれている。「ボランティア活動はその人の自発性によって行うものであるから、評価する必要はない。」「ボランティア活動は社会的に重要な活動であるから何らかの評価が必要である。」「ボランティア活動を取り組むきっかけのために、入学試験などでなんらかの評価をすべきだ。」などの意見もある。²⁵⁾「評価といってもその意味はまちまちであるので、整理してみる。

一つは、ボランティア自身が今後の活動をよりよくするための観点から評価必要論である。もう一つは、ボランティア活動を社会的に広く推奨するための評価必要論である。

前者については、論議は必要ないと思うが、後者の社会的推奨の立場である。これには表彰制度、コンクール、入学試験制度などへの採用である。しかしこれによって、ボランティアの自発性をそぐことになるのではないかという批判がある。

学業成績や入試制度の序列化にボランティア活動が組み込まれると、成績向上の道具や手段になってしまうのではないかという危惧もある。²⁶⁾

学校教育における評価は、「教科活動」と「教科外活動」に位置づけられる。

一つめの教科活動に位置づけることである。その場合その教科の目的に照らし「評価」することとなる。結果だけを見るのではなく、そこにいたプロセスを重要視しなければならない。そうでないと教師は、「評価」しなければといった狭い枠にとらわれやすく、評価の観点が、ボケてしまい子供の意欲と主体性にあることを見落としてしまう。

二つめは、教科以外の活動に位置づけることである。部活動や生徒会活動の特別活動、さらに学校行事、PTA活動、学校と連携した地域活動まで含め、一人ひとりの活動体験をプラス評価として広く認めること、すなわち結論としてではない形成的な評価をすることが大切である。

子供たちの活動や体験に、優劣や序列ではなく、「きっかけ」として学んだことを認めるという評価が妥当である。その充実をはかるためには、自己評価の工夫が必要である。²⁷⁾

5 アルバイトの位置づけ

生涯学習審議会は、平成4年7月の「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」の答申の中で生涯学習と青少年の学外活動の意義につ

いて「生涯学習は、人々が自発的な意思に基づいて行うことを基本とするものであり、これに必要な積極的な意欲、課題発見や課題解決の能力等の基礎は、人間形成の基礎が培われる青少年期に養う必要がある。これらの意欲・能力等は、学校教育と学校外における多様な生活体験・活動体験があいまって、総合的・全人的に形成されていくものである」と述べている。さらに、「今日、子供の無気力さや引きこもりなどの現象が指摘されるようになっており、学校外の日常生活の中で、異年齢集団における多様な活動経験を通して、子供の自立や社会性を促すことも大切である」とも述べている。

これらのことも踏まえてアルバイトの位置づけを考える必要がある。たしかにアルバイトをどの部分に位置づけるかは、非常にむずかしい問題である。学校は基本的に禁止か許可制を取っている。しかし、アンケートからもわかるように4人に3人はアルバイトの経験があり、生徒や社会情勢の実態に合わなくなりつつある。禁止や許可制を見直す時期にきているのではないか。当然アルバイトの性格上何らかの制約や条件を付けてアルバイトを実施させる。

特別活動の一環として位置づけ、放課後の学外学習として位置づけられないか。可能であれば働くことの意義や仕事に対する責任感を、実体験を通してとらえることができると思うが。

家庭の現状の中でも述べたが、家庭での生活体験や学校外における直接体験的活動も不足がちでこれらのバランスをとるためにも学外活動の充実が重要である

現在職業高校では現場実習が取り入れられている。システムとしては同様には、とらえられないが、生徒一人ひとりに社会人として責任と自覚をもたせる意味でも大切なことではなかろうか。

毎日新聞教育「21世紀へ」の中の当世アルバイト事情に、学生援護会の木ノ内博道氏は、「教育は社会から隔絶したところで行うという考え方が根強い日本の風土も変化しつつある。アルバイトの職業教育的、社会学習的側面が注目されてきた。そもそも教育とは一人前の社会人を作り出すことも大きな目的ではないか。」とのべている。日本青少年研究所長の千石保氏は、「アルバイトを各学校の判断に任せるのはやめて、正規の授業の一環として位置づけるなどアルバイトの教育効果をきちっと認識すべきではないか。」と提言している。²⁸⁾

6 アルバイトの課題

アルバイトを特活に位置づけることができた場合
どのような問題や課題が考えられか。

- ・アルバイトについてどのように生徒に考えさせるか。
- ・学校生活とアルバイトをどう両立できるか。
- ・活動する時期や時間帯をどのように設定するか。
- ・対象学年をどうするか。
- ・週当たりの日数を決めるか。
- ・部活動のように希望者のみにするか。
- ・職種をどうするか。

挙げればきりがないかもしれない。確かに課題の多い問題ではあるが、生徒の多様化が進む現在何らかの形で取り組まなければならない。

栃高教組県教育研究集会の「生徒指導における教職員の意識調査」発表資料のアルバイトについて見ると、調査対象は県内各校8名の教職員（集計数511名）。

アルバイトの良否について

- (ア) 良い 298 (58.3%)
- (イ) 良くない 203 (39.7%)

(ア)の主な理由

- 社会勉強と視野が広がる
- 勤労の喜びと苦しみがわかる
- お金を正しく得る方法とその大切さを学べる

(イ)の主な理由

- 学生としての本分を忘れる
- 交友関係で問題がある
- お金を自由に使い非行につながる
- 学業に専念すべき

アルバイトが良いと答えた方に対しての間
(重複回答あり)

(ア) 時期について

平日も良い	70名
土日祭日のみ	61名
長期休業中のみ	138名
その他	19名

(イ) どのようなアルバイトなら良いかの主な回答

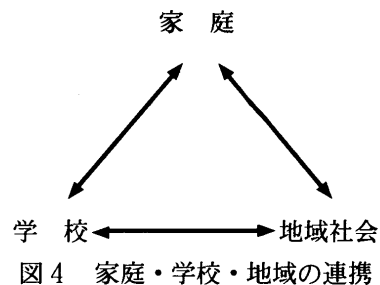
接客（風俗）関係以外	34名
夜間に及ばないもの	33名
安全性のある仕事	33名
新聞・郵便等の配達	14名

調査対象 県内各校8名(511名)の教職員

以上が研究集会の報告の抜粋である。教職員もある程度はアルバイトはやむおえないと見ているようである。²⁹⁾ 生徒たちのアンケートの回答と同じような結果もある。時期やどのようなアルバイトが良いかについては、このようになるのは当然と思われる。

まとめにかえて

最後に、学校教育ですべてのことを身に着けることは困難である。家庭や地域社会など、学校外での総合的な体験や活動を通してより多く経験させることが、従来にも増して必要になってきている。そのためにも青少年の社会参加については、図4のように家庭・学校・地域社会のそれぞれが連携しあって考えていかなければならない問題である。本文でも述べたが、地域や学校単独では



なく、地域社会の施設を利用して学校教育活動や、学校施設を利用して社会教育活動など、学校と社会の融合をはかるべきであろう。さらに、高校生に活躍の場が設定され、主体的に活躍できるようになれば、生徒たちが持っているエネルギーを発揮できるようになる。

それがボランティア活動であれば、責任感や達成感をあじわえ、本音でぶつかり合える仲間を得ることができ自己の存在感が実感できると考えられる。

信州大学経済学部では、平成4年度のカリキュラム改革に際し、『産業社会特別実習科目』を設置した。具体的には、「産業論特別実習」と「現代社会論特別実習」の2科目である。

「産業論特別実習」は、企業活動や産業活動に関連する就業的体験を素材にした分析や研究などの勉学活動を評価し勤めることを目指し「アルバイト単位」と通称されている。「現代社会論特別実習」は、産業活動外の社会活動や国際交流活動に関連する実習・研修などの非就業的体験を素材とした自己勉学を奨励し「ボランティア単位」と通称されている。³⁰⁾

アルバイトの位置づけ、ボランティアの評価と

いった問題や課題が徐々にではあるが、論議されるようになり職業高校等における扱いも、見直しを検討されなければならない時期に来ているのではなかろうか。

注・参考文献等

- 1) 『青少年の徳性と社会教育について』社会教育審議会答申1981/5.9発表「第1部現代社会と青少年1青少年の意識・行動」より引用した。
- 2) 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』第15期中央教育審議会答申1997/7.19発表「第1部今後における教育の在り方」を参照した。
- 3) 同上
- 4) 朝日新聞夕刊「ウォッチ論潮」1997/5.28参照した。この中で加藤仁氏は、「経済的に繁栄していたころは会社にのみ帰属することにそれなりの自負をもっていた父親が、リストラに直面して家庭に戻ったものの、呆然自失しているのだ」と分析している。
- 5) 太田政男「いま、中学生・高校生の暮らしを考えるーもう一つの学び、もうひとつの居場所ー」『月刊社会教育』No.4481993/89頁を参照した。
- 6) 同上 8頁を参照した。
- 7) 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』第15期中央教育審議会答申 1997/7.19発表「第1部 今後における教育の在り方」を参照した。
- 8) 下野新聞社会面「運動部離れに拍車」 1997/11.5から引用した。
- 9) 文部省生涯学習局婦人教育課「特集ボランティア最前線ーボランティア活動の現状と展開ー」『月刊社会教育』全日本教育連合会1994/8の26頁から引用した。
- 10) この意見と同じような意見が、毎日新聞栃木版1998/1.24「カウントダウン栃木21世紀へ」の中で神戸で開催された「全国ボランティア研究集会」に参加した足利市の女子高生の発言が紹介されている。それは「ボランティア自然に活動できれば良いな」で多くの共感を呼んだ。
- 11) 佐々木英和「生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察」(生涯学習・社会教育学研究第20号東京大学大学院教育学研究科発行)の29頁「欲求領域の三角形」を参照した。
- 12) 『在学青少年に対する社会教育の在り方について』社会教育審議会建議 1974/4.26発表「家庭教育、学校教育と社会教育との連携」を参照した。
- 13) 同上
- 14) 渋谷英章「新しい視座学社融合」(週間教育資料No.544 1997/9.15) 35頁より引用した。
- 15) 「学社融合」を目指す事業の開発事例1997/3発行
- 16) 笹沼隆志「生涯学習社会における学校教育の在り方をめぐる一試論ー学社連携・融合の論理的考察を切り口にしてー」(宇都宮大学生涯学習教育研究センター内留報告書)(近刊)の7頁図4「学社連携・融合」を参照した。
- 17) 興梠寛(社団法人日本青年奉仕協会理事)「ボランティア活動のための基本的知識を理解するーボランティア活動の教育的意義をどう考えるかー」教育開発研究所編教職研修1997/12増刊号29頁より引用した。
- 18) 牧野禎夫(帝京大学教授)「学校・家庭・地域連携読本ー地域を生かすボランティア体験学習ー」教育開発研究所編教職研修特集No.125の127頁を参照した。
- 19) 『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』生涯学習審議会答申 1992/7.29発表「第2章ボランティア活動の支援・推進について」を参照した。
- 20) 同上
- 21) 佐々木英和(宇都宮大学生涯学習研究センター専任講師)により、1997/10.15公開講座「市町村の生涯学習研究」の中でまとめられた資料を参照した。
- 22) 同上
- 23) その基本理念から無償性ということが言われているが、有償化も検討されるようになってきた。特に阪神淡路大震災以降いわれるようになった。
- 24) 栃木県教育委員会「栃木県ジュニアリーダースクラブ名簿」1997/11発行を参照した。
- 25) 池田幸也(全国ボランティア学習者連絡協議会副代表)「ボランティア活動のための基本的知識を理解するーボランティア活動の評価をどう考えるかー」教育開発研究所編教職研修1997/12増刊号の41頁を参照した。
- 26) 同上42頁を参照した。
- 27) 同上

- する資料より1997/12
アルバイトがそのまま単位になるとか、ボランティア活動がそのまま単位になるとかの、誤解を受けるむきもないではなかった。

Q6 どのようなアルバイトがしたいですか。？（特にしたいアルバイトを2つ以内で選んで下さい）

1. コンビニエンスストア 2. スーパーの店員 3. ガソリンスタンド
4. ウェイター・ウェイトレス 5. ファーストフード 6. 飲食店 7. 建設業
8. 製造業 9. 事務員 10. 郵便局
11. 運送会社 12. プールの監視員 13. その他（ ）

Q7 アルバイトは週何日ですか。？

1. 1～2日 2. 3～4日 3. 5～6日 4. 毎日 5. 休日
6. その他（ ）

Q8 アルバイトは一日平均何時間ですか。？

1. 1～3時間 2. 4～6時間 3. 7時間以上

Q9 アルバイトをして良かったことは何ですか。？（特に良かったことを2つ以内で選んで下さい）

1. 社会の厳しさを知ったこと 2. 働く大切さを知ったこと 3. 社会の見方が変わったこと
4. 人間関係を学んだこと 5. 多くの人と交流することができたこと
6. 接客の難しさを知ったこと 7. 礼儀正しくなったこと 8. 専門の事に詳しくなったこと
9. 地域の地理がわかったこと 10. お金を稼ぐのは大変だということ
11. その他（ ）

Q10 アルバイトをして困ったことは何ですか。？（特に困ったことを2つ以内で選んで下さい）

1. 時間がなくなること 2. 寝不足になったこと 3. ストレスがたまったこと
4. 体調を悪くしたこと 5. 学業に支障がでた 6. 仕事を覚えるのが大変なこと
7. 職場になれないこと 8. 客とのトラブルが発生したこと 9. 人間関係が難しいこと
10. 客から苦情を言われたこと 11. その他（ ）

Q11 アルバイトについてどう思いますか。？（特に思っていることを2つ以内で選んで下さい）

1. 社会に出る前に経験した方がよいと思う 2. 学校の許可はとくにいらないと思う
3. 学校の許可の範囲内がよいと思う 4. 自分のため、社会のためにも良いと思う
5. 学業に支障がない程度がよいと思う 6. したい人がすればよいと思う
7. 特に興味がない 8. その他（ ）

ボランティア活動について

Q12 ボランティア活動をしたことがありますか。？

1. 現在している 2. 現在していないが、したことはある 3. したことはない

Q12' ボランティア活動の動機は何ですか。？

（ ）

Q13 Q12で1と2を選んだ人はどのようなボランティア活動をしたことがありますか。？

1. 手話による会話 2. 子供会の行事 3. 環境美化 4. 老人介護 5. 福祉施設訪問
6. 募金活動 7. その他（ ）

Q14 ボランティア活動に参加したいですか。？

1. 是非参加したい 2. 機会があれば参加したい 3. あまり参加したくない 4. 参加したくない

Q15 Q14で参加したい人は、どのようなボランティア活動に参加したいですか。？

(特に参加したいものを2つ以内で選んで下さい)

1. 手話による会話
2. 子供会の行事
3. 環境美化
4. 老人介護
5. 福祉施設訪問
6. 募金活動
7. 自然災害の復興
8. 海外ボランティア
9. その他 ()

Q16 Q14で参加したくない人は、どうしてですか。？

1. 参加したい人がすればよい
2. 興味・関心がない
3. 他にやることがあり時間がない
4. その他 ()

Q17 ボランティア活動をどう思いますか。？(特に思っていることを選んで下さい)

1. 社会に役に立つことだと思う
2. 多くの人が参加すべきだと思う
3. やりがいがあると思う
4. 心が豊かになると思う
5. 大切なことだと思う
6. 自分を見直す機会になると思う
8. その他 ()

※ 以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

その他、高校生の社会参加について、ご意見等があればお聞かせ下さい。

おわりに

この度、平成9年度内地留学の機会をいただき、宇都宮大学生涯学習教育研究センターで研究活動に取り組んでまいりました。指導教官で同研究センター専任講師の佐々木英和先生には、本研究を進めるにあたり、具体的・計画的に物事の見方・考え方をご指導いただきました。また、センター長で同教授の見目明継先生、同事務の久保田尚子さん、同前期研究生の笹沼隆志先生、同後期研究生室井健一先生には公私ともに大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

学校の現場では、学社連携・融合と言われ、生涯学習に関して、佐々木先生担当の3つの生涯学習関係の公開講座や大学での授業「教育原論」を受講させていただきました。ここで生涯学習の理念や位置づけなど、さまざまな方向から理論や知識を得ることができました。また、多くの教育関係の書物や文献からも、研究に役立つばかりでなく、教育現場や自分のものの見方・考え方・実践の方法などにも大いに参考になることが多く、大変有意義な研修の機会となりました。

研修開始後、研究テーマの決定に時間を費やし、また、多くの情報を収集するために、数多くの専門書や論文を読ませていただきました。研究報告書のまとめでは、どう関連づけて理論的にまとめるか苦勞しました。しかし、すべてが自分自身の実となり、生涯学習という言葉がより一層身近になったような気がします。今後、教育の現場で実践にはげみ、さらに研究を深めていきたいと考えております。

また、本研究において、高校生の社会参加についての調査に、ご協力をいただいたことも忘れられません。アンケート調査を引き受けていただきました県内の工業高校には、大変お世話になりました。お忙しい中、時間を割いてお話をお聞かせいただきました諸先生方にも、心から感謝申し上げます。

さらに大学では、多くの先生方の授業を拝聴させていただき、新たな情報や知識を得ることができました。

最後になりましたが、貴重な研究活動の機会を与えてくださいました栃木県教育委員会、ならびに内地留学期間中、温かくご支援くださいました栃木県立真岡工業高校宮本明博校長先生はじめ、同校の教職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月